

日本の国土は、亜寒帯から亜熱帯にまたがる大小の島々からなり、そこには屈曲に富んだ海岸線と起伏の多い山岳など変化に富んだ地形や各地の気候風土に育まれた多様な動植物相が見られます。

「モニタリングサイト 1000」では、このような日本列島の多様な生態系を、高山帯、森林・草原、里地、湖沼、湿原沿岸・浅海域、小島嶼に分け、あわせて 1000 か所程度のモニタリングサイトを設置しており、2003 年度より調査を実施しています。基礎的な環境情報の収集を長期にわたって継続することで、日本の自然環境の質的・量的な劣化を早期に把握し、得られた成果を保全施策や学術研究に活用することを目的としています。

モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査は、干潟をはじめとした湿地生態系の健全性を測ることを目的に、干潟や淡水湿地を利用するシギ・チドリ類と絶滅危惧種であるズグロカモメ、クロツラヘラサギ、ヘラサギ、ツクシガモ（以下「シギ・チドリ等」という。）の個体数調査を、全国に約 140 箇所設置しているサイトで春期（4月から5月）、秋期（8月から9月）、冬期（12月から2月）の計3シーズンで実施しております。

本調査では、各シーズン中に基準日を設け全国一斉に調査を実施し、基準日近辺に国内に飛来するシギ・チドリ類等の総個体数を把握することを目的とした「一斉調査結果」と、シーズン中に飛来したシギ・チドリ類等が最も多く飛来した時の個体数を累計し、各調査サイトの環境収容力を把握することを目的とした「最大個体数結果」の2つの結果を報告しています。

「シギ・チドリ類調査ニュースレター」は、結果の速報や関連情報をお知らせするために、2009 年よりシーズンごとに発行しています。バックナンバーは以下よりご覧いただくことが出来ます。

<http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/index.html>

また、各期の調査報告や年度ごとの総括報告書では、全調査サイト配置図や全調査対象種の内訳、各調査サイトにおける調査結果等をまとめております。

<http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/index.html>



モニタリングサイト1000

モニタリングサイト1000

シギ・チドリ類調査

ニュースレター

環境省自然環境局生物多様性センター / NPO法人バードリサーチ

2017年 冬期概要

2017年冬期の結果の概要

モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査の2017年度冬期の概要をお知らせします。

個体数は前年より減少

2017年度冬期調査は、2017年12月1日から2018年2月28日までの期間実施されました。111ヶ所の調査サイトで調査が実施され、このうち一斉調査（2018年1月14日を基準日とした前後1週間の調査）への参加は107ヶ所でした。一斉調査期間では、シギ・チドリ類37種29,455羽、ツクシガモ2,950羽、ヘラサギ12羽、クロツラヘラサギ215羽、ズグロカモメ2,390羽が記録され、冬期の全サイトの最大個体数（調査期間内に記録された各種個体数の最大値）の合計では、シギ・チドリ類46種45,386羽、ツクシガモ5,645羽、ヘラサギ38羽、クロツラヘラサギ402羽、ズグロカモメ3,823羽が記録されました。

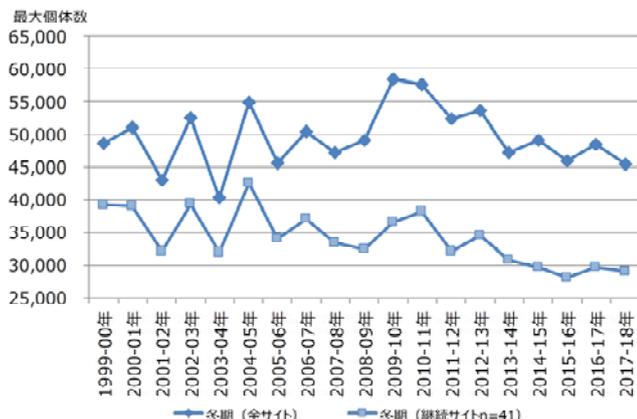


図1. 冬期調査における全サイトと継続調査しているサイトの最大個体数合計の推移 (1999年から2017年の継続サイトN=41)

表1. 2017年冬期調査の優占種

ハマシギ	<i>Calidris alpina</i>	30,440	67.1%
シロチドリ	<i>Charadrius alexandrinus</i>	3,807	8.4%
ダイゼン	<i>Pluvialis squatarola</i>	3,233	7.1%
ミユビシギ	<i>Calidris alba</i>	1,904	4.2%
タゲリ	<i>Vanellus vanellus</i>	1,180	2.6%
ムナグロ	<i>Pluvialis fulva</i>	805	1.8%
ミヤコドリ	<i>Haematopus ostralegus</i>	664	1.5%
アオアシシギ	<i>Tringa nebularia</i>	438	1.0%
メダイチドリ	<i>Charadrius mongolus</i>	427	0.9%
タシギ	<i>Gallinago gallinago</i>	397	0.9%
その他	The others	2,091	4.6%
全種合計		Total No. of individuals of all species	45,386 100.0%

1999年冬期以降の「全サイトの最大個体数の合計」と「調査が継続されているサイトのみの最大個体数の合計」を、グラフに示しました（図1）。全サイトの最大個体数の合計は、前年度冬期と比べ3,141羽減少（-6.5%）し、継続サイトでは前年度冬期と比べ529羽減少（-1.8%）して、29,027羽となりました。全サイト、継続サイトとともに2010年冬期頃から増減を繰り返しながら減少傾向が続いています。

最大個体数における優占種の上位種は、ハマシギ（67.1%）、シロチドリ（8.4%）、ダイゼン（7.1%）、ミユビシギ（4.2%）、タゲリ（2.6%）、ムナグロ（1.8%）で、前年度順位からムナグロが下がり6位となってタゲリが5位となりました（表1）。干潟に生息しているツクシガモ、ヘラサギ、クロツラヘラサギ、ズグロカモメの個体数は、ツクシガモの減少傾向が止まり、ほかの3種は前年に比べ大きな変化はありませんでした。



写真1. ツクシガモ

本州より寒かった九州の冬

地域別にシギ・チドリ類の個体数をまとめ、前年の冬期調査と比較しました(表2)。もともとシギ・チドリ類の越冬個体数は、太平洋側や西日本で多く、北海道・東北地域では多くはありません。今年度は、前年度0羽だった北海道東部で約200羽のシギ・チドリ類が観察され、関東周辺、伊勢湾などでも前年度より個体数が多く、逆に九州地域で個体数が少ない傾向がありました。

普段の越冬地の環境が変わった可能性が考えられるため、関東と九州の主要な越冬地である東京湾と有明・八代海周辺の海拔10m以下の気象庁の観測点をまとめ、冬期シーズンの月平均気温を見ました(図2)。2017年冬期の調査期間は前年に比べて1~2℃寒い冬でしたが、東京湾よりも有明・八代海のほうが平均気温が低い傾向があり、特に今シーズンの12月は前年に比べ-4℃程度低下していました。このよう



図2. 東京湾(羽田・江戸川臨海・千葉)と有明・八代海(八代・松島・水俣・白石・川副)の冬期調査期間中(12月~2月)の月平均気温

な気温の変化のため、九州地域からさらに南へ広く分散、もしくは北の地域に留まったのかもしれない。

ムナグロとメダイチドリの急減



図3. 過去5年間のムナグロとメダイチドリの冬期の最大個体数の推移

種類別では、メダイチドリとムナグロが今年度シーズンは急減していました(図3)。どちらも

多くが沖縄で越冬しているため、沖縄地域のサイトも確認したところ似た減少傾向がみられました。要因に関しては詳しくわかりませんが、前段と同様に気温の影響が考えられます。

また、渡来数は少数ですが、ヨーロッパトウネン(写真2)の報告が増えました。近年、繁殖分布が広がっているようで、ロシア東端のチェコト半島でも確認されています。今後国内でも越冬例が増える可能性があります。



写真2. ヨーロッパトウネン

○参考資料

気象庁:過去の気象データ検索

<http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php>

表2. 地域別における全シギ・チドリ類総個体数の前年度との差(青は増加、赤は減少した地域)

地域別総個体数 (最大渡来数) 個体数 Number of Max Count	2016年度冬期 2016 Winter	2017年度冬期 2017 Winter
	北海道東北部	0
北海道東部	0	192
北海道西部	1	1
東北太平洋岸	376	349
東北日本海岸	84	190
関東太平洋岸	1,303	1,481
関東内陸湿地	687	843
東京湾と相模灘	5,174	5,418
能登半島周辺	909	741
駿河湾	152	63
伊勢湾	4,136	4,257
大阪湾周辺と紀伊水道	1,508	1,460
山陰	336	352
瀬戸内海西部と周防灘	6,347	5,662
四国太平洋岸	65	73
博多湾周辺	1,492	1,206
有明海と不知火海	20,856	20,240
九州南部	586	488
沖縄本島	2,764	1,671
宮古・八重山	1,228	679
合計	48,004	45,366

モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査 ニュースレター タイトル写真:ハマシギ(守屋年史) 2017年 冬期概要

発行元: 環境省自然環境局生物多様性センター <http://www.biodic.go.jp/moni1000/>

編集: 特定非営利活動法人 バードリサーチ <http://www.bird-research.jp/>

編集者 守屋年史 電話/Fax:042-401-8661 メール: shigichi@bird-research.jp